

6 『生きる思想(新版)』
——反＝教育／技術／生命——

近代的制度が人間の自律的な営みを奪う過程を批判的に問い続けたイバン・イリイチ。ここでは、住まいを築き生活を営む「住人 (dweller)」が、住まいを消費する「居住者 (resident)」へと変えられた現代社会を考察する。商品や管理空間ではなく、暮らしを築くための基盤として住まいを捉える視点は、祐成氏 (2頁) の議論の理解を深めてくれる。

イバン・イリイチ＝著 桜井直文＝監訳
藤原書店／1999年



7 『パブリックライフ』
——人とまちが育つ共同住宅・飲食店・公園・ストリート——

住まい、飲食店、公園、ストリートを舞台に、身近な暮らしの場をまちへとひらく実践を紹介する一冊。東京都内の事例を通して、場所のつくり方や運営のあり方が、人と人、人とまちの関係を少しずつ組み替えていくことを示している。土地や建物を使い直し、人が集い、新しい使われ方を生みだしていく柏元氏 (8頁) の実践とも響き合う。

青木純・馬場未織＝著
学芸出版社／2024年



8 『マンションの「老い」』

弁護士であり定期借家権・終身借家権の立法に関与した著者がマンションが抱える「建物の老い」「人の老い」「ルール」の老い」を分析し、対応策や解決方法を整理・検討する。資料として、民法、区分所有法、再建特別措置法、マンション建替え円滑化法などの関連条文や、残置物の処理等に関するモデル契約条項なども抜粋して収録。神吉氏の論考 (26頁) とともに、実務にも役立つ一冊だ。

吉田修平＝著
金融財政事情研究会／2025年



9 『居住福祉資源発見の旅』
——新しい福祉空間、懐かしい癒しの場——

寺社と祭事、銭湯、ローカル線、郵便局——。一見、福祉と無関係ではありながら、地域社会における人々の健康と生きがい、暮らしを支える施設や文化の数々。著者自ら内外を旅して得た事例を分析しながら、これらを「居住福祉資源」と論じた本書は同分野の嚆矢と言える一冊であり、増井・三浦両氏の対談 (32頁) を読む格好の補助線にもなる。

早川和男＝著
東信堂 居住福祉ブックレット／2006年



10 『福祉施設からはじまる
多世代ごちゃまぜ 地域共生社会』

社会福祉法人の理事長である著者は、「施設」を自宅の延長線上にある生活の場として捉え、入居後も地域や社会の一員であり続けることを重視する。多世代コミュニティカフェやサービス付き高齢者向け住宅での大学生同居プロジェクトなどの実践を紹介しつつ、福祉施設を拠点コミュニティとする「家族機能の社会化」の可能性を示す。

権頭喜美恵＝著
幻冬舎／2024年



1 『新しい地域福祉の「かたち」をつくる』
——「福祉コミュニティ」概念に基づく政策・実践の統合——

地域福祉の実践を考える際は、コミュニティづくりの難しさ、安易な「自助」への転換など課題も多い。本書は、地域経済の循環を包むコミュニティ再生、参加・協働・自主管理を重視した「支え合い」と地域包括ケアの実際を、豊富な事例により提示。制度的な支援と、暮らしの場での関係性を結び直すという視点は、今号の問題意識と共鳴する。

伊藤葉子・川村岳人・中田雅美 ほか＝編著
ミネルヴァ書房／2024年



2 『地域を基盤としたソーシャルワーク』
——住民主体の総合相談の展開——

公助が中心の従来の福祉から、「本人主体」を基軸とした新たなソーシャルワークの実践へ——本書が提示するのは、地域の担い手が主役の総合相談拠点という新たな方法論だ。北海道津別町の事例をはじめ、理論と実践が補完し合う内容は、細川氏 (14頁) と小川氏が「るつぽん」で目指す「点から面」の地域福祉の試みにも通じている。

岩間伸之・野村恭代・山田英孝・切通堅太郎＝著
中央法規／2019年



3 『団地へのまなざし』
——ローカル・ネットワークの構築に向けて——

団地をめぐる言説を、文化論や記号論、欲望論から概観、イメージや記憶装置としてのあり方、さらにはネットワークや相互扶助の視点から、自在に論じた野心的一冊。埼玉県草加松原団地を長期フィールドワークした内容は、団地を社会の歩みの記録、現状の課題の鏡と捉える有原氏 (20頁) の論考への“東”からのひとつの回答と言える。

岡村圭子＝著
新泉社／2020年



4 『ハウジング・バイ・ピープル』
——〈居住の自律〉を取り戻す——

1976年に刊行された、建築家であるジョン・F・C・ターナーの古典的名著の日本語全訳版。「住宅は何をもたらすか」という問いから、中央集権的な住宅政策を批判。途上国都市の「建てる自由」に、居住の自律という本来の姿を見出す。訳者による解題では、本書が住宅政策に与えた影響を現代の視点から解説し、日本との接点にも触れている。

ジョン・F・C・ターナー＝著 岡部明子・岡川厚輝＝訳
慶應義塾大学出版会／2025年



5 『町に住まう知恵』
——上方三都のライフスタイル——

増井・三浦両氏の対談 (32頁) では、歴史的に育まれた都市の住まい環境が、大阪独自の「包摂の仕組み」の基盤だとの認識がなされた。語らいの場となった「大阪くらしの今昔館」初代館長の著者が、堺・京・大坂・奈良の都市居住文化の蓄積と学ぶべき知恵を読み解いた本書は、関西のお節介文化＝支え合い精神の理解への視座を与えてくれる。

谷直樹＝著
平凡社／2005年



住まいと暮らしの社会課題を 考えるための10冊

住まいと福祉、建物と暮らし、制度と地域のつながりをどう結び直すのか。
生活文化と居住支援の視点から、住まいと暮らしの未来を考える、
今号の特集の理解を深める10冊を紹介します。

